



# 続 謙澄を追う人々

題字  
棚田看山

その4

末松謙澄と吉田健作は文字どおりの竹馬の友でした。謙澄の出版した健作の遺稿集『異郷の友垣』には「健作能く予を知り、予亦能く健作を知る。予の在るは猶健作の在るが如し」と記されています。

嘉永五（一八五二）年、現在のみやこ町勝山上田に生まれた健作は、水哉園で謙澄と約六年間机を並べていました。謙澄の父臥雲の世話で小倉県の書記となりましたが、明治八（一八七五）年に健作は謙澄のあとを追うように上京し、勸業寮の雇として農務課に勤務し後に正式に内務省官吏に採用されます。この間に健作は欧米の製麻業を研究して、製法の近代化の必要性を痛感し、技術習得のための留学を当時の勸農局長松方正義に上申し一八七八年、松方正義に随行してパリ万博に派遣されています。この時には偶然にも英国公使館一等書記見習として渡英する謙澄と同じ船でした。パリ万博のあと、フランス北部リール市の製麻会社に入って実地研究を開始し、昼間は亜麻



中央が謙澄、左上が健作

## 吉田健作

### ～水哉園の同窓で幼なじみ～

の栽培方法を、夜は製造業の研究に寝食を忘れて取り組みました。この時謙澄もリールを訪れ、旧交を温めながらも健作の健康を心配しています。

三年にわたる研究を終えて一八八一年に帰国、本格的な製麻業の近代化に取り組み、一八八六年、フランスから取り寄せた機械による近代的な製麻工場「近江製絲紡織会社」を立ち上げました。その後、栃木県に「下野麻紡織会社」を、さらに「北海道製麻会社」を立て続けに開業させました。この時に健作の片腕となって現地に赴き活躍したのが水哉園の後輩や仲津郡・京都郡の若者たちでした。この三つの会社は後に帝国製麻株式会社に統合され大会社となり、健作は『製麻業の父』とよばれますが、リールで得た持病の喘息が悪化し明治二十五（一八九二）年に四十二歳の若さで没しました。一八九七年には健作の偉業をたたえ、創業の地滋賀県大津市の三井寺境内に顕彰碑が建立されました。その碑文には謙澄の言葉「工業が盛んになった今日、あなたを喪ったことを国家のために深く惜しむものである」が弟の吉田学軒の字で書かれています。

末松謙澄顕彰会 植田義浩